

●挨拶



## 次代を担う安積の精神

福島県立安積高等学校長 廣瀬 涉

本校は今年、創立百二十周年を迎えることが出来ました。同窓生、地域の方々、本校に奉職された教職員はじめ多くの関係各位が、長年にわたり直向きに真理を求め、互いに切磋琢磨し、労苦を厭わず弛まぬ努力をし続けた賜物であり、衷心より敬意と感謝の意を表します。明治十七年に福島師範学校内に福島県福島中学校として開設され、明治十九年の中学校令により、一県一中学校となり、若松・平の中学校は廃止され、県内唯一の中学校となりました。校名も福島尋常中学校と改称され、明治二十二年には現在地の桑野村新校舎に移転いたしました。桑野御殿と呼ばれた旧校舎は、当時の桑野村開拓民の汗と財の無償の提供という絶大なる誠意と期待をうけて、立派に完成しました。昭和四十八年三月までの八十四年間、学び舎としての役目を果たし、今、多くの先輩諸兄の熱き青春の思い出を残し、安積魂のシンボルとして、その名を安積歴史博物館と改め荘厳として聳えています。昭和五十二年に、国の重要文化財に指定されました。安積歴史博物館に一步足を踏み入れるとき、本校の歴史と伝統、そして安積に学んだ先輩諸兄の熱き魂の息吹を感じます。館内に掲示されております一期生から現在に至るまでの卒業生の尊顔を拝するとき、その一人一人の先進の意気身にしめつ熱き情熱が、ひしひしと迫り感動を覚えます。志高く、自己を研磨し、互いの思いを真剣に語り、この学び舎で人間としての生き方を学んだのであります。人としてどう在るべきか、安積はどうあるべきか、天下国家はどうあるべきか、何をなすべきか、討論は続き時には深夜にまでおよんだとあります。故きを温ね新しきを知り、常に在るべき姿を問う真摯な姿勢が、安積の伝統を築いてきたのであります。この安積の風土が多くの人材を世に輩出してまいりました。今も、安積歴史博物館の前には、「安積健児の像」が未来をしっかりと見つめつつ立っています。

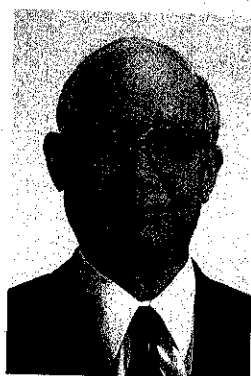
平成十三年四月に、本校は男女共学となり、男女共学一期生も文武両面にわたり活躍し、新しい歴史の一步を築いて卒業していきました。百二十周年という節目の年に入学した百二十期生は男女共学四期生となります。男女共学になり

まして、本校生は、安積の精神である「開拓者精神・質実剛健・文武両道」を継承し、創立以来変わることのない校歌や「紫の旗ゆくところ」を謳い、互いに切磋琢磨しながら青春の日々を真剣に生きています。時代は変わろうとも、本校生のなすべきことは、安積の精神を学び、志高く、次代を担う有為な人間に成長し、国内外を問わず各界各地で中心的役割を果たしながら活躍しておられる先輩各位の後に続き、必ずや将来、国家社会、人類に貢献することでありま

す。この安積の精神は継承され生き続けなければなりません。自主自律の校風を自覚し、驕りを捨てて誇りを持ち、知徳体を磨き、自らが何事にも真摯に積極的に学ぼうとする安積高校生に、未来を託します。

創立百二十周年に遭遇出来ましたことを大きな喜びとし、生徒、教職員が一丸となって、輝かしい歴史と伝統を踏まえ、本校の更なる発展、充実を目指し、明日に向かって邁進してまいります。関係各位の皆様方の一層のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

●挨拶



## 安積の未来

創立百二十周年記念事業実行委員長 石川博之

母校は、本年九月十一日、創立百二十周年の節目を迎えます。私は、百二十年の節目に過去の歴史の足跡を見、それを未来に繋げるのが百二十周年のお祝いであると考えております。

百二十年の歴史を振り返ると、母校は明治十七年に創立され、明治十九年四月公布の「中学校令」により県下唯一の県立中学校となり、以来、福島県の中等教育の先導的役割を担って存続し、現在に至ったもので、安積の歩みは、まさに福島県における中等教育近代化の歩みそのものであります。

そして、旧本館は、明治二十二年、福島県の中心に位置する開拓の地である桑野村に白亜の殿堂として創建され、以来、百十余年の昔から私たち安積健児を見守ってきたものであります。旧本館は、単に古く貴重な国の重要文化財であるというだけでなく、この建物の中で、先人達がいかに学び、いかに生きていくべきかが受け継がれてきたのであり、無言の中に私達に語りかけ、教えてくれているのであります。それが「開拓者精神」に象徴される安積の三つの校風であり、伝統であります。

更に、旧本館は創立百周年に当り、安積の歩みばかりではなく、福島県における高等学校教育のあるべき教育の姿を問いつけるために、安積歴史博物館として保存され、福島県地域教育の振興にも寄与することになったのであります。

しかし、時は変わり、少子高齢化、国際化、更には男女共同参画社会の到来と、学校を取り巻く環境は大きな変革を求められるようになり、県下全ての県立高校を男女共学にという佐藤知事の教育理念により、安積も創立以来、百十余年男子進学校として県下に名をはせてきましたが、平成十三年、男女共学校に変わりました。

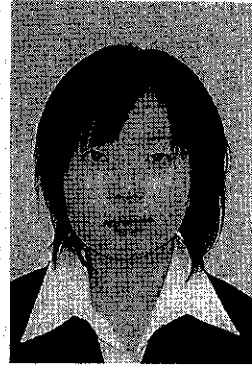
そして四月、教職員、生徒達が十分審議して、校則の大幅な見直しを行い、制服を廃止しました。

教育というのは、もともと二十年後、五十年後に成果が出てくることを期待しているわけではありませんが、肝要なことは、日々、男女共学のプラスの側面とマイナスの側面の事実を直視しながら客観的で冷静な複眼の視座によって、それをいかにトータルに捉え、じっくりとその成果を検証してゆくことだと考えます。

正門を入ってすぐ左手にある明治、大正、昭和三代にわたる安積健児の像は、遠望する視線の先に何を見つけているのでしょうか。いずれにせよ、生徒諸君は、どんな時代に安積に生きているのかを良く見定め、安積の伝統はどこへ向かってゆくのか、そしてその方向を決めていくのはこれからの生徒諸君だと思えます。

最後になりましたが、百二十周年記念事業実行委員会は、教職員及び生徒達の現場の意見を十分に吸い上げ、且つ伝統に沿った記念事業として、男子、女子生徒が同時に合宿できるように同窓会館の改修、受験対策のため、三年生の教室にエアコンを設置して、文武両道の実をあげるべく、また、生徒諸君に開拓者精神を体得してもらうべく、安積歴史博物館に現在活動している先輩の資料展示室を設けることにし、現在前倒し的に施行いたしております。

百二十周年の年に奇しくも巡り会い、教職員、生徒一同、PTA、同窓会及び桜桑会のみなさんと共に明日の安積の発展のために微力を尽くせることを感謝しつつ、挨拶といたします。



## 新しい「開拓者精神」

安積高等学校生徒代表 熊田純子

今年、百二十周年を迎える本校は、「質実剛健」「文武両道」「開拓者精神」を校風としている。その校風のもと、明治の美学者高山樗牛や世界的歴史学者の朝河貫一といった、様々な分野で活躍するすばらしい先輩方を、数多く輩出してきた。

この歴史ある本校が大きな転換期を迎えたのが四年前の二〇〇一年である。これまで男子校であったのが共学化され、本校に初めて女子が入学したのだ。このことに関し、私は先日、共学化を間近に控えた時に発行された生徒会誌「安積野」第百十四号の「共学化について」という特集記事を読んだ。そこからは、共学化に関して生徒側が困惑していた様子を読み取ることができる。例えば、「共学化についてどう思うか」という質問に対し、賛成の人は二六パーセント、反対の人は四五パーセントと、共学化反対の人が圧倒的に多かった。その理由として、「安積の伝統が崩れてしまう」というものがあった。これは六年前のアンケートの結果だが、はたして女子が入ったというだけで、安積の伝統が崩れてしまうのだろうか。

確かに、女子が入ったということで、男子校までの安積とは違っているという意見を耳にすることがある。しかし、女子が入ることで崩れてしまうというほど、安積の伝統とは脆弱なものなのだろうか。「開拓者精神」というものを校風の一つとする安積高校であれば、共学化という新しい環境に適応し、勉強や部活動などの学校活動において、男子生徒と女子生徒が互いに協力して、より高いものを目指していくというのが本来のあり方ではないだろうか。そして、このことこそが、安積の目指す「開拓者精神」であり、この精神を受け継ぎ、さらに発展させ、次につないでいくことが、安積の伝統を守ることになるのではないか。

私が入学したのは、全ての学年に女子生徒が入った二〇〇三年である。入学してからの二年間、先輩や友達と男性や

女性といった性にとられわれず、勉学・部活動に励んでいる姿を私は見てきた。それらの活動の原動力になっているのが、共学化により新しい意味を与えられた「安積の精神」ではないだろうか。このように、新たな歴史が築き上げられていることに、共学化四年目の生徒として、私は大変誇りに思う。

百十六年の間に、先輩方はすばらしい伝統を築いてくれた。そしてこの四年の間に、女子生徒が加わったことで、その伝統はより豊かになるのではないか。今後は、先輩方が築き上げてくれた伝統に甘んじることなく、これからの新しい歴史は自分達で作りに上げる、そのような「開拓者精神」を持ち、これからの安積の歴史を私達は切り拓いていくべきだろう。

百二十周年という節目の今年、安積の一員、そして未来を担う一員であるという自覚を持ち、新たな気持ちで安積からたくさんのごことを学んでいきたい。

(現生徒会長一一九期)

## ●安積高校への想い



### 安積への想い

矢吹 純

学校という学舎で学習活動を行う際に、男女を分ける必要はあるだろうか。男女という性の違いは、勉強とは何の関係もないだろう。たとえ、どんなに別学の良さを並べられたとしても、私には到底納得できないだろう。

安積高校は、創立以来男子校であった。平成十年度に県教育委員会は、県内に残された男女別学校の共学化年次計画を発表した。そして安積高校は、平成十三年度より男女共学が実施されることとなった。私自身は共学後の女子二期生であり、男子のみの学年との学校生活を経験した最後の学年の生徒である。私が見聞きした限りでは、男子校にも確かに、共学校にはないよさがあるようだ。

しかし、共学になって、男子・女子それぞれの意見を聞ける場があることや、男女共に協力し合って、学校行事や部活動に参加することなど、男子校では決して体験できない貴重な場が多くできた。このことは、男女共に社会をつくるという当たり前のことを実践しているに他ならない。また、共学になって一番良かった点は、学校が開放的になったことだろう。やはり「男子校」「女子校」というのは、異性に対する

勘違いや偏見を、大きくしてしまっているのではないだろうか。しかし、共学後の安積高校を訪れたOBは、皆必ずと言っていいほど、「(共学になって)学校の雰囲気明るくなった」と、感想を述べる。これには、共学になり、男女という二つの視点から生徒の意見が交わされ、生徒達の視野が広がったことが、一因しているのであろう。

現在、私達安高生は、男女共に机を並べて学校生活を過ごしている。「別学校」に学んだ人達にとっては不自然なことと感じられるかもしれない。だが、共学化されたこの姿の方が、自然だと思う。でも、もし安積高校が「男子校」から「共学校」にならなかつたら、女子である私は安高生になれなかつた。今、共に学びあっている男女の友人達と出会っていなかつたら、私の高校生活は、まったく違うものになっていただろう。そう考えると、改めて、共学化された安積高校に入学してよかつたと思う。

共学化に際しては、当時の生徒会役員をはじめとする先輩方と先生方が、何度も話し合いを積み重ねてきた。また、在校生のみでなく、当時の中学生を対象に、共学後の安積のあり方を探るアンケートを実施して、各施設や部活動・行事等の準備を下さつた。しかし、女子生徒を受け入れるにあたって、一番苦心したのは、「設備」の準備よりも、「意識」の改革だったのでないだろうか。共学化が進められていく一方で、同窓会は依然として共学に反対し続けていた。また、共学になると、今までの安積の伝統が変わってしまう、と考

えた生徒がいたようだ。他にも、今まで男子ばかりだったところに女子が入ったらどうなるのだろうか、在校生や先生方にも少なからず不安があったようだ。

しかし、一番不安を感じていたのはほかでもない、この安積に入学してくる女子一期生だったはずだ。女子一期生はこれまで女子生徒にとっては男ばかりの未知の世界であった。「元男子校」へ、不安を抱きつつも、向上心とその「開拓者精神」を胸に入学した。彼女達は、ほぼ何もなかったようなところから部活動の形を整え、安積高校で男女が共に勉強することを普通のことにした。こうして、私が女子二期生として入学したときには、男女共学の環境はすでにできあがっていた。確かに、共学になった後も、女子生徒が共に校内にいることに不満を述べる男子生徒もいたそうだが、その反面、共学化を支えて下さった先輩方が大勢いたことも事実であるう。

また、生徒会誌『安積野』一一六号(二〇〇一年)で特集された、共学以前の男子生徒へのアンケート結果を見てみると、共学になると生徒会行事が変質してしまうと考えていた先輩方がたくさんいたようだ。しかし実際は、そのようなことはない。荒々しく、体力が必要とされるため、共学化後に行うのは難しいと思われる対面式や応援歌練習等の伝統的行事も、男女一緒に例年のように続けられている。また一昨年には、従来の安積高校独特の雰囲気に加えて、男女共学校として新たな風を吹き込まれた紫旗祭も行われた。このよ

うにして、共学化された安積高校での学校生活は、現在の安積高生によって日々創られている。

このような、安積高校の変革は、「男女共生」への一歩を確実に踏み出したと言える。しかし、それには多くの人の努力があったことを忘れないでいたい。ここで思い起こすのは、ある先生が、離任の際におっしゃった言葉である。

『君達には謙虚であってほしい。君達の先輩には、確かにすごい人がいっぱいいるけれど、そのことに驕らないでほしい。謙虚で、一所懸命な姿こそが美しいのだから。』

私はこの言葉を聞いて、私達はこの地域の「安高ブランド」に好い気になっていやしないだろうか、と考えさせられた。しかし、安積高校が今日の姿でありうるのは、在校生である私達ではなく、卒業した先輩方の努力の結果である。そのためにも私達は安易に「安高ブランド」に寄りかかるのではなく、新しい安積の歴史を作り上げていく必要があるのではないだろうか。

ところで、私が生徒会長として活動していた際に感じたことは、生徒の学校に対する無関心さである。在校生は、今現在の状態のみに満足してしまっているようだ。そのため、学校の今後のあり方への関心が希薄となり、主体的かつ自律的に学校と関わっていかうとする姿勢が低くなることに、つながっているのではないだろうか。確かに、考えている生徒もいるのかもしれない。だが残念ながら、その声を公の場できちんと聞くことはなかった。多くの生徒達は、誰かがやって

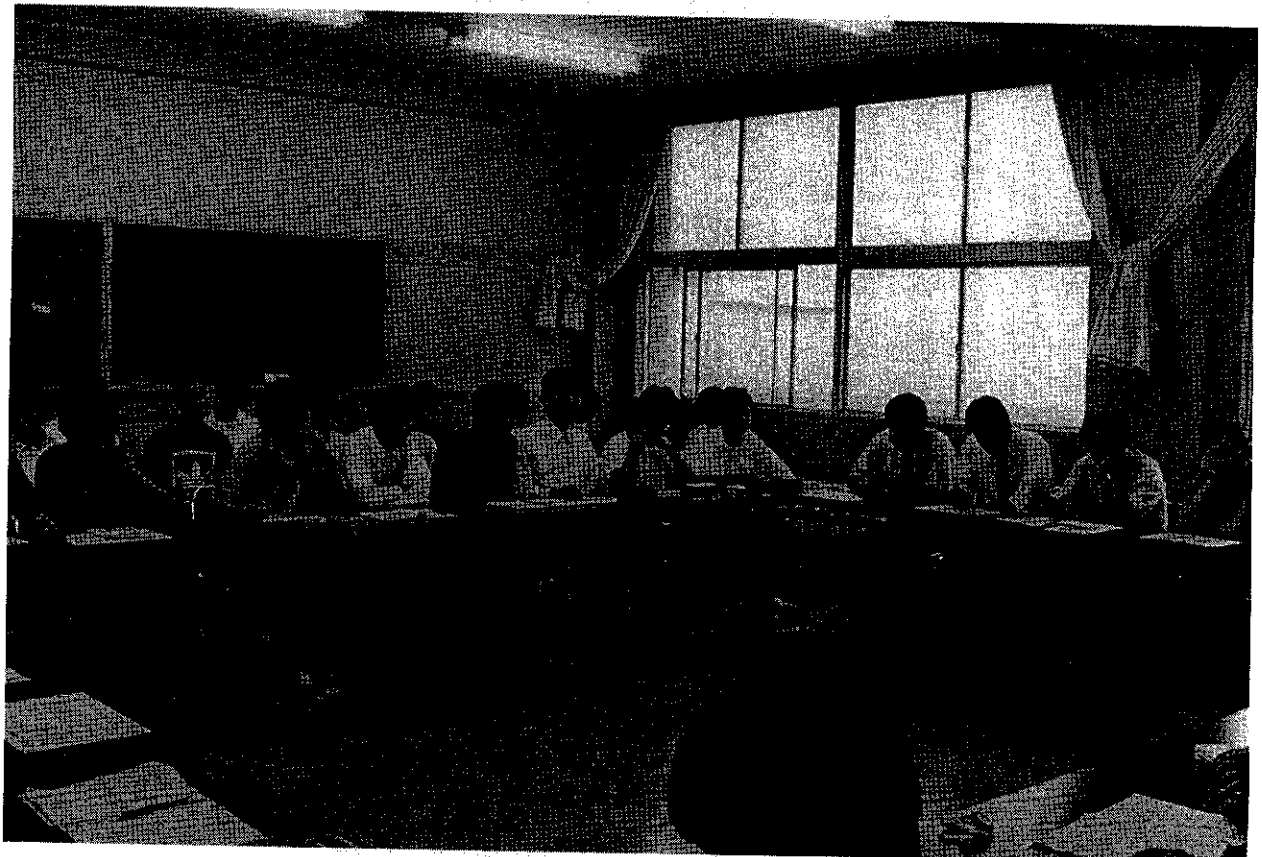
くれるだろうと思っっているのだろうか。あるいは、声を発するのが面倒なだけなのかもしれない。

しかし、無関心は危険なことだ。そこには向上心が生まれない。また、向上心がないということは、先に進むこともないということだ。実際、新たな局面に進むためには、向上心が必要不可欠である。男女共学化という変革を終えた安積高校は、次のステップへと挑戦すべき時を迎えようとしている。確かに、それは容易なことではないだろうが、現状への安住は禁物である。共学化したからそれでよいのではなく、今度は、男女共同参画社会にふさわしい、真の共学校を目指すべきであろう。

現在、私達は安高生として、伝統を受け継ぐとともに、その時代時代に相応しいものへと変えてきた。安積はこれからも、大なり小なり、時代に即応して変化を繰り返していくだろう。このように、ひとつの形式にこだわることなく、その時の安積に必要なものが生まれていけばいいと私は思う。だが、変わっていく中で、忘れてほしくないこともある。それは、安積の学び舎に集う生徒達が、共に切磋琢磨していることとであり、自分達の手で何かを成し遂げようとしていることである。そして何より、安積高校を好きだという気持ちを忘れないでほしい。そしていつだって、胸を張ってこう言える姿であり続けてほしい。

「我々は安高生である」と。

(安積高校三年 前生徒会長・一一八期)



生徒職員協議会